

令和元年度学校自己評価システムシート(東邦音楽大学東邦第二高等学校)

目指す学校像		音楽芸術の一貫教育を通じ、情操豊かな人格の形成を目指す					
本年度の重点目標		1.音楽基礎科目の学力の更なる充実・普通教科の基礎学力の定着と充実 4.演奏活動・ボランティア活動【音楽活動を通して、積極的な地域貢献活動への参加(ボランティア活動)と舞台芸術(ブ 2.基本的生活習慣の確立、綺麗な言葉遣いをする、思いやりのある人格形成 ロのオペラ団体との共演)への意欲的な取り組み】 3.進路指導					
		年度目標		年度評価			
領域	評価項目	現状と課題	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策
1 学習指導	○多様化する生徒達の音楽に対する、それぞれのモチベーションの向上を目標にした、各専攻実技における指導方法の見直しと検討。	・専攻別の個人レッスンの指導に於いて、重要なポイントとなる音楽の基礎であるソルフェージュのスキルの差が顕著になっている現状がある。個人レッスンにおいても、ソルフェージュのスキルの指導を加味し、個々の生徒に現状に合わせた、個々に寄り添った細部に渡っての指導の検討が課題となっている。又、楽典の基礎を理解・習得するのが難しい生徒に対して、いかに指導をしていかも課題となっている。	・先ず、7月の期末試験・前期実技試験の時期までを目標に、ソルフェージュ、楽典の授業担当者としてレッスン担当者が、いくつかの基礎力をチェック出来る観点項目を設定し、それぞれの観点項目の評価を基に、個々の生徒の基礎学力とスキルの力を把握し、指導の方法の修正を図った。但し、試験曲の選曲にあたっては生徒のモチベーションを向上させる為に、生徒とのコミュニケーションを密にし、意欲関心を鑑みて決定していた。	・一学期のソルフェージュ・楽典の基礎力と前期の専攻実技の基本的なスキルの状況を基に、生徒個人個人に『夏期休業にすべき課題』を提示し、その達成度を8月下旬の補講期間に確認することとした。 その状況を把握し、ソルフェージュ・楽典の指導方法・内容を検討し、3学期の指導に反映させていった。一方、特に専攻実技に関しては、基礎的な演奏技術面で完成度の低い部分に関しては徹底的にクリアーさせる事を目標とした。	・各専攻レッスンは、今まで以上に生徒とレッスン担当者との連携を図ることで、生徒のレッスンに向かう姿勢や努力目標の決定など、具体的な指導状況・生徒の日常練習の様子などに変化が認められ、レッスン担当者と生徒との情報交換は概ね良好な状況であった。	A	・音楽の基礎力(楽典、ソルフェージュ)の育成には、生徒、担当教員、そして担任との連携プレーによって、概ね一人一人に学習成果を得られた。次のステップとしては、各専攻実技の演奏力と表現力の充実と如何に効果的にそれを反映させていくかが、高大接続の観点で検討が必要である。
	○普通科目(英語、数学、国語)の基礎学力の定着と充実を目指し、中学教育の復習を取り入れながら、高等学校の教育課程の内容に負担感がなく取り組めるように進めていく。	・音楽科受験者には入試に専攻実技が課せられるため、その準備に相当な時間が掛けられている傾向がある。その為、中学校での普通教科・科目の学習に費やす時間が制約されてきた状況が見受けられる。特に、国語力(現代文)の低下が目立ち、物事の理解力の低下に結びついている。国語の読解力、文章作成能力、日本語の実践的なコミュニケーション能力は、生徒達の問題解決能力のベースとなる為、全般的な国語総合力の充実は不可欠である。	・基礎学力(国語、数学、英語)の確実な定着を目指した指導に当たっての具体的な方策。 ①当日の授業のポイントを具体的・明確に生徒に提示する。 ②授業内で可能な限り、質問・小テストなどで理解度を確認する。 ③生徒が授業内容が正確に理解されているかどうかを課題、ノートの検査等で再確認する。 ④各学期の評価に当たっては、観点別評価により、学習への意欲・関心・態度の状態を判断する一つの手段として、提出物の徹底を図る。	・基礎学力の定着に関しては、『反復学習』による効果が認められる。 ①国語の指導の中の『漢字ワーク』の定期的な提出と『漢字テスト』の徹底した反復指導による効果は顕著である。 ②英語では毎学期適宜、『課題(英文の要約、スピーチ原稿の作成とスピーチの実施等)』を課すことにより、4つのスキルの向上の確認を行なう。(英語による実践的なコミュニケーション能力の基礎を確立する為)	・近年、生徒の学習・学校生活に取り組む姿勢が多様化してきている。その中で本校の教育による学習成果を測る『評価方法』は、学習指導要領の目標としている：『知識や技能の到達度』+『自ら学ぶ意欲や思考力、判断力、表現力などの資質や能力』の評価を基本とするものである。生徒一人一人の学習意欲の向上と生徒に自己の学習到達度を認識させる為に、各教科・科目においてより具体的な方策を見つけ、それをいかに具体的に実践していくかが課題である。	A	・普通教科、音楽科目に対する生徒の『意欲・関心・態度』を評価する、ノート提出・課題提出・レポート提出に関しては、担当教員だけに任せるとはならず、各学年のH担任との協力を得て、各学年・全教科において提出率は100%に達していた。これは、生徒の学習習慣を確立することに大きく貢献していた。これは、来年度以降も継続して指導していくポイントの一つとする。
2 生徒指導	○基本的な生活習慣の確立の指導 1 時間厳守の確立 2 個人所有物の自己管理の徹底、HR教室内の整理整頓 3 携帯電話の安全な使用方法	・1『時間厳守の指導』の徹底を指導しているが、特に、放課後の楽器の自主的な練習時間(延長練習の届け出制度：夏時間は6時まで、冬時間は5時半まで)が有効に使われていないのが現状である。 2 個人所有物の自己管理に関しては、放課後の生徒の机上の整理整頓が出来ていない状況が見受けられる。また、教室の後部の棚の上に個人所有物が散乱している。 3 本校での携帯電話の指導：校内への持ち込みは許可制とする。秩序ある使い方の指導をHRや全体集会で指導していか、徹底できていない。また、メール、ライン等の不適切な使用による生徒間のトラブルも時々見受けられる現状がある。	・1 今年度は、『下校時間の徹底』を図ることを目標とし、生徒指導主任と日直教員との連携で下校指導をしていく。、下校時の生徒の安全・安心を確保するためにも、下校時間5分前より校内の巡視を実施していく。 2 個人所有物の自己管理の徹底を図るため、放課後の校内巡視の際、HRの生徒の机上の整理整頓の状態をチェックすると同時に、教室全体の整理整頓(特に教室後部の棚の上に個人所有物が散乱していないかを確認することとする。)個人の不注意による所有物の紛失が数件あった。 3 今年度は特に、『携帯電話安全教室』を計画し、その中で『メール、ラインなどSNSの使用』にあたって、NTTの協力のもとに生徒への注意を喚起させていく。	・1『下校時間の徹底』に関しては、生徒指導主任と日直教員との連携で毎日継続指導していく中で、徐々に改善が見られた。ただ、本校は音楽科であり、実技レッスンが時として下校時間後に終了する場合もあり指導の難しさはある。 2『個人所有物の自己管理』については、毎日の教員による下校指導と運動させての指導の結果として、改善が徐々に認められる。また、教室内の整理整頓においては、生徒個人の認識に温度差があり中々改善に苦慮している。 3『携帯電話安全教室』での講話の中で、具体的な『メール、ラインなどSNSの使用の危険性』についてかなり強調されていたので生徒達の認識に変化が見受けられた。(生徒間のメール、ラインに関するトラブルが減少した)	・1 基本的な生活習慣の中で『下校時間の厳守』には学校として総力を挙げて、基本的な学校生活の規律の一つとして取り組んできた。指導の効果は得られてはいる。しかし、ある面で家庭での『時間厳守』に対する認識にバラつきが有るように受け止められた。 2 生徒個人の机上の『個人所有物の自己管理』については、毎日の教員による下校指導の際、机上に散乱している個人所有物は担任が預かり、翌朝生徒を呼び出し、厳重な注意を与える形をとることにより概ね完璧に指導目標を達成できていた。教室内の整理整頓を徹底させるにはまだ課題が残った。3『携帯電話安全教室』を毎年継続して実施指導した結果、生徒たちに“安全な使い方”と“SNSの危険性”に対する認識が定着してきた。ただ、SNSに関しては、学校として完全に把握できていない面があり、これは今後のさらなる課題となった。	B	・1『時間厳守』は当然社会に出る前に身に付けておかなければならない不可欠なものであるという認識の基に、継続して来年度も『基本的な生活習慣の確立の最重要課題』の一つとして挙げ指導していくこととする。 ・2『個人所有物の自己管理』は概ね、教員の連携プレーによりクリアーできたものの、毎年の生徒の状況の変化に伴い、継続した指導することとする。教室の整理整頓が出来ていくかないか、そのクラスの『学習環境』に影響を及ぼす可能性もある為、来年度も継続指導の必要性は認められる。 3『携帯電話の安全な使用方法』については、SNSが日々複雑に変化している現状の中で、学校として生徒の安全・安心を確保するため、更なる細部に渡る指導の必要性がある。
	○高大接続という一貫した音楽教育システムを実践することで音楽芸術の探究を目指す。	・音大附属高校のミットを生かした音楽科としての本校独自のカリキュラムの実施。専攻実技の課題曲に関しては特に、将来、系列大学・短大に進学した後、より効果的・効率的演奏スキル、表現力を身に付ける為のベシクなスキルの養成を目的に組織的に組み立てられている。その他の音楽科目として音楽理論、ソルフェージュ、又、普通科目に於いては外国語(ドイツ語：3年生で2単位)など将来を見据えた履修体制を取っている。大学卒業後、グローバル化社会との関わりを視野に入れ、いかにして自己実現できるスキルを修得させていくかが課題となっている。	・系列大学・短大教員により実施されている『大学・短大進学講座』は高校生達に、大学・短大の教育の内容の理解と、将来大学・短大で自分がどの分野を専攻していくか、更にどのような力を身に付けて社会と関わって行くかを検討する良い機会となっている。また、先輩とのコミュニケーションを図るコーナーでは、大学生生活での様子やキャリア教育の実体験など、附属高校生達には現実の大学・短大の様子を理解する上で、良い機会となっている。更に、生徒達が大学・短大の『体験授業』を受講することで高大接続の教育の意義を生徒達が直接経験することが出来た。	・系列大学・短大への進路指導という観点から、『大学・短大進学講座』『大学・短大体験授業』が、各学年に於いて、どのような位置になっているかを正確に把握する必要がある。それを踏まえて、附属高校生にとって『音楽』という芸術を幅広い見地から捉える為に『大学・短大進学講座』『大学・短大体験授業』の位置づけを再確認させる必要がある。更にその結果と進路指導とをどうリンクさせていくかが更なる課題である。	・『大学・短大進学講座』では、卒業生(附属高校から系列大学・短大へ進学して卒業した卒業生)が現在のどのような形で音楽を生かして社会との関わりを持っているかが具体的に紹介されていた。中学校音楽科教員、自衛隊音楽隊の隊員、音楽療法を実践している施設職員、演奏活動に従事している卒業生、音楽教室指導者などから、それぞれの現場での様子とその職業に関わるための具体的な準備の仕方なども具体的なアドバイスとして伝えられ、高校生のキャリア教育の一歩となっていた。	A	・最近では、高校生とその父母は大学・短大を卒業した後の具体的な社会との関わり部分をシビアに見据えて進路決定をする傾向が強まっている。『大学・短大ではどのような人材を育て、その育成のためにはどのような指導・教育がなされているのか』を具体的に分かりやすく、どのように高校生とその父母に楽しくいかに大きな課題である。大学・短大と附属高校との綿密な情報の共有を前提に、生徒一人一人に寄り添った進路指導を進めて行くこととする。
4 演奏活動・ボランティア活動	○学内・学外に於いて、多様な形態による『演奏活動』を実施する。ソロの演奏、その演奏技術・表現力ベースとした、アンサンブル、ワインドオーケストラ、弦楽合奏へと『総合的な音楽力』へと発展させていく。オペラ彩主催のプロのオペラ団体の公演への出演。東邦音大・短大・東邦第二高等学校の生徒・学生は、『合唱』で参加。	・附属中学校・高等学校・第二高等学校合同演奏会(30.4.29)各学校より演奏者の選抜して、本校音楽ホールにて開催。 ・附属中学校・高等学校・第二高等学校合同合唱(30.10.8.) ・附属中学校高等学校第二高等学校合同演奏会(30.10.9.)各学校ワインドオーケストラによる合同演奏 ・オペラ彩より、5月に12月公演オペラ『ナブッコ』への出演依頼。	・オペラ彩・合唱団として高校1,2年生14名が合唱のメンバーとして出演する。 8月より土曜日、日曜日を中心に稽古が始まり、生徒達は全く初めてオペラに挑戦することとなる。勿論、全体の稽古以外に第二高校の音楽専攻の専任教諭が放課後等、学内で合唱(基礎練習)の指導をし、それを全体練習に生かせるようにする。	・10月からの立ち稽古では、プロで活躍されている東邦音大の佐藤泰弘氏が参加された。プロの中で、生徒達は相当の緊張感を感じながら演技と歌に意欲的に取り組んでいる。	・本番の2日間は大盛況で会場、サンアゼリア(和光市)は熱気に溢れていた。生徒達は意外と落ち着き、稽古の時より役になりきり声高々に個々の役を立派にこなしていた。 大勢のプロの方々と共に創り上げた大舞台の一員として出演出来たことは生徒にとって大きな喜び・感動となり、一人一人の音楽感に大きな変化と新しい広がりを与えることとなった。	A	・今年度のオペラ彩主催、オペラ『ナブッコ』への出演に引き続き、来年度も出演依頼が来ており、音楽科の生徒達にはこの上ない魅力であり、日常の学習では味わえない貴重な体験を得られるチャンスなので、他の学校行事とのバランスを考慮しながら前向きに生徒の参加を検討していくこととする。来年度は、『カルメン』の公演が予定されている。
	○2 ボランティア活動とその具体化についての再検討	・ボランティア演奏会の実施。 川越市東部地区ふれあいセンターでのミニコンサート(1.5.24) 南古谷病院でのミニコンサート(1.10.10) 帯津三敬病院でのクリスマスコンサート(1.12.12) (ボランティア活動の内容と活動範囲を検討する)	・ボランティア演奏会の実施計画の作成。 演奏者は会議で選考し、演奏形態・演奏曲目は各演奏会ごとに検討する。	・ボランティア演奏会は生徒達にボランティアの意義を認識させると共に、生徒達はその場に相応しい演奏の在り方を創意工夫しその演奏の準備に自主的に取り組んでいる姿勢が見受けられた。 生徒達は、改めて『ボランティア』は何か、その活動とはどのようなべきかを考察していた。	・生徒達はボランティア演奏会を通して、ボランティア活動の社会的意義と色々な形態での演奏会の在り方を学習した。これまでの様々な活動が評価されて、2012年ボランティア支援団体『国際ソロプチミスト埼玉』からの認証を受けて以来、毎年その活動には更に意欲的に取り組んでいる。	A	・『ボランティア活動』は『演奏会』のみに限定せず、様々な形態を検討し、更なる充実と推進に努めるとともに、地域貢献への積極的かつ意欲的な活動を検討していく。 来年度は、『国際ソロプチミスト埼玉』に於けるボランティア活動への参加を予定している。
	○3 地域貢献を目指した演奏活動	・南古谷ワインドオーケストラの活動：毎週土曜日午後、近隣の中学生、高校生、一般社会人と本校のワインドオーケストラから勇士メンバーが参加して、地域吹奏楽団体として練習している。 南古谷ニューイヤークンサート (南古谷地区の小・中・高等学校、また地域住民との活動)	・南古谷ワインドオーケストラの活動。 ニューイヤークンサートin南古谷への出演。	・毎週土曜日午後東邦音楽大学での地域の中学生・高校生・一般社会人から構成されている、南古谷ワインドオーケストラの練習(演奏)は『地域の音楽芸術に対する意識の向上』に長年に渡って貢献している。	・定例化しているニューイヤークンサートin南古谷は、年々地域からの参加団体も増え、更なる充実が図られていた。同時に、地域貢献の意義を本校の生徒達により一層理解させていた。	A	・『地域に根ざした音楽への意識の向上』を目指した南古谷ワインドオーケストラの演奏活動は、ニューイヤークンサートin南古谷をメインに今後益々その練習・演奏活動を活性化させていくこととする。
	○4 埼玉県近郊の『音楽系高等学校との合同演奏会』の実施。音楽専門教育の活性化を図る。	・音楽教育の活性化を図る為に近隣の音楽系高等学校が参加して、『第九回北関東甲信越音楽系高等学校合同演奏会』を6月15日(土)に開催予定。(東邦第二高等学校主催)	・『第九回北関東甲信越音楽系高等学校演奏会』(6月15日土曜日)の為に、諸高等学校との演奏の形態、演奏曲目、演奏時間等の打ち合わせを開始する。	・『第九回北関東甲信越音楽系高等学校演奏会』(本校音楽ホールで各校の代表演奏者による演奏会を実施する。本校生徒は全員その演奏を鑑賞する。この演奏会には出演者の演奏への意欲の向上と、聴く生徒に演奏者から演奏と向き合う姿勢を学ぶ良い機会となっている。	・演奏会を通して『各学校の演奏した生徒達は、それぞれが日々の自分の演奏のテクニック・表現力などを振り返りつつ、良い機会となった。同時に『音楽系高等学校間の親睦』にも大いに貢献できていた。	A	・『第十回北関東甲信越音楽系高等学校演奏会』は来年度6月に開催する予定。学校間の交流を図りつつ、生徒達の演奏技術と音楽性の向上に更に良い演奏会を目指して行くこととする。

達成度 A:ほぼ達成(8割以上) B:概ね達成(6割以上) C:変化の兆し(4割以上) D:不十分(4割未満)

※学校関係者評価とは、最終回の学校評価懇話会で、学校自己評価を踏まえて評価を受けたいとする。(実施日令和2年3月17日)

学校関係者：4名

学校関係者 評価	
学校関係者からの意見・要望・評価等	
	<p>○高い評価を受けている項目</p> <p>1 学校経営全般：学校は、建学の精神に基づき系列の大学・短大進学を視野に入れながら一貫教育を推進している。</p> <p>2 教育課程全般：学校は、教育方針に基づきOne to One教育を推進している。</p> <p>3 生徒指導全般：生徒達の安心・安全を確保する為の基本である『時間厳守』：特に下校時間』の指導が徹底されている。</p> <p>○改善要望項目</p> <p>1 公開授業：年間指導計画に位置付けて周知して欲しい。(年2回希望)</p> <p>2 学校だよりを発行して欲しい。(各学期2回)</p> <p>3 普通教科・科目について：授業時間数の確保と内容の充実を希望。特に、新学習指導要領に基づき、主体的な学習や教科横断的に育成すべき情報運用能力、問題解決能力、想像力の育成を図る授業形態を構築して欲しい。</p> <p>4 演奏活動、学校行事と定期テスト・実技試験の、日程調整が不十分でテスト準備が十分にできない状況があった。</p> <p>○学校として次年度に向けた対応策</p> <p>1 公開授業は計画的に行事予定に位置付け、できれば年2回公開を目指す検討する。</p> <p>2 学校として『学校だより』(各学期2回)を発行する。</p> <p>3 学校HPは更に発信力のあるものにする工夫と改善に努める。</p> <p>4 普通教科・科目について、時間数の確保と内容の充実を務める。特に英語・数学・国語において、5年間行事予定の見直し・検討～諸行事と定期テスト・実技試験との関係(テスト準備が充分に取れるように)を検討する。</p> <p>6 現在の定期試験の試験範囲の発表時期(2週間前)において、十分な試験準備ができるように現状より早めに発表することを検討する。</p>